A study on Rohan Kôda's Annotation *Hyôsyaku Basyô-Sitibusyû*

露伴〈評釈芭蕉七部集〉考

日沼滉治

一　はじめに

この小論は、幸田露伴の『評釈芭蕉七部集』を概観しようとする。評釈は大正九年の「芭蕉研究書目解説」（歌誌『潮音』）に始まって没後の出版に及んだ。近代最初の全評釈である。作業は詩集『心のあと　出廬』（明38・1・1、春陽堂）以来の詩心にかかわっており、最晩年の口述をふくむ。その点では『音幻論』（昭22・5・30）とともに、その半生の文学観・言語観をうかがわせるものであろう。小論はつぎの順序をたどろうとする。

時期　視点　実際　典拠　考証　『潮音』以前　『潮音』以後　露伴における意義

二　時　期

世にいう〈芭蕉七部集〉を成立順に示すならばつぎの通りである。

①「冬の日」②「春の日」③「曠野」④「ひさご」⑤「猿蓑」⑥「炭俵」⑦「続猿蓑」

集ごとに露伴評釈のあとを年表風にたどれば、つぎの通りである。（◎は序・跋　○は七部集全体）

◎芭蕉研究書目解説　大9歌誌『潮音』1月号・4月号　全集第二十巻
昭4・9改造社『木屑』所収　旧全集

◎芭蕉七部集抄引
冬の日抄引　大13・9岩波書店『冬の日抄』（春日）　旧全集・第二十巻
春の日曠野抄引　昭2・6岩波書店『春の日・曠野抄』　旧全集・第二十巻
ひさご猿蓑抄引　昭4・12岩波書店『ひさご・猿蓑抄』　旧全集・第二十巻

◎芭蕉七部集抄跋　昭5・1岩波書店『炭俵・続猿蓑抄』跋　旧全集　第二十巻

①評釈冬の日
木枯の巻　大9歌誌『潮音』10月号・11月号・12月号・大10・1月号・2月号・5月号・6月号・7月号・11月号・12月号
冬の日木枯の巻概観大11歌誌『潮音』1月号
昭4・9改造社『木屑』所収　第二十巻
初雪の巻　大13歌誌『潮音』1月号・2月号・3月号・4月号・5月号
しぐれの巻　大13歌誌『思想』1月号・2月号・3月号
大13・9岩波書店『冬の日抄』

冬の日抄引	大13・9岩波書店『冬の日抄』（春日）	旧全集・第二十巻
冬の日補正	昭2・6岩波書店『春の日・曠野抄』付載	旧全集・第二十巻
	昭9・9岩波書店『評釈冬の日』	旧全集
	小林勇所蔵「冬の日抄」原稿及び書入本を校合	第二十巻
評釈冬の日引	昭19・9岩波書店『評釈冬の日』	第二十巻
②評釈春の日		
俳諧連歌の部	昭2・6岩波書店『春の日・曠野抄』	旧全集
春の日曠野抄引	昭2・6岩波書店『春の日・曠野抄』	旧全集・第二十巻
発句の部	昭8雑誌『文学』12月号	
	昭21・1岩波書店『評釈春の日』	
	小林勇所蔵「春の日抄」原稿及び書入本を校合	第二十巻
③評釈曠野		
あら野抄（その一節）〈「雁が音の巻」初裏　二句目から六句〉	昭2雑誌『潮音』7月号	
俳諧連歌の部全部	昭2・6岩波書店『春の日・曠野抄』	旧全集
春の日曠野抄引	昭2・6岩波書店『春の日・曠野抄』	旧全集・第二十一巻
巻之一・巻之二	昭19雑誌『文学』1月号・2月号・3月号・12月号・昭20・10月号・11月号・12月	

号

巻之一〜巻之五　昭21・11岩波書店『評釈曠野』上

曠野集雑句評釈　巻之六〜巻之八　昭22雑誌『文芸春秋』1月号・3月号・6月号・7月号〈第一四〇句以下は口述、土橋利彦筆記〉

昭23・5岩波書店『評釈曠野』下

小林勇所蔵「曠野抄」原稿と幸田家蔵「評釈曠野」原稿断片を校合　第二十一巻

④評釈ひさご

ひさご猿簑抄引　昭4・12岩波書店『ひさご・猿簑抄』　旧全集

同　旧全集・第二十二巻

昭22・5岩波書店『評釈ひさご』

小林勇所蔵「ひさご抄」原稿を校合　第二十二巻

⑤評釈猿簑

俳諧連歌の部　昭4・12岩波書店『ひさご・猿簑抄』　旧全集

ひさご猿簑抄引　同　旧全集・第二十二巻

発句の部　昭10雑誌『思想』11月号・12月号・昭11年3月号・4月号・5月号・7月号・8月号・9月号・10月号・11月号

昭12・2・5岩波書店『評釈猿簑』（岩波文庫　緑12－10）第1刷、91・3・7現在第8刷
昭22・12『評釈猿簑』再刊
小林勇所蔵「評釈猿簑」原稿を校合　第二十二巻

⑥評釈炭俵
俳諧連歌の部　昭5・1岩波書店『炭俵・続猿簑抄』　旧全集
解題　昭9・12宇田久編「古版俳諧七部集」六『炭俵定本』〈大岡山書店〉に転載
発句の部〈口述、土橋利彦筆記〉
昭22雑誌『人間』9月号・10月号・11月号・12月号
昭24・4岩波書店『評釈炭俵』
小林勇所蔵「炭俵」原稿を校合　第二十三巻

⑦評釈続猿
俳諧連歌の部　昭5・1岩波書店『炭俵・続猿簑抄』　旧全集
解題　昭10・8宇田久編「古版俳諧七部集」七『続猿蓑定本』〈大岡山書店〉に転載
発句の部〈口述、土橋利彦筆記〉
昭26・9岩波書店『評釈続猿簑』（俳諧連歌の部・発句の部）

○『露伴評釈芭蕉七部集』　31・1・30　中央公論社

○『評釈芭蕉七部集』　58・2・18　岩波書店

小林勇所蔵「続猿簑抄」原稿を校合　第二十三巻

これによれば、露伴の評釈の手順はつぎのようなものであった。

①連歌から　②集の順に　③昭和八年から発句へ　④雑誌発表のあと単行本に

芭蕉七部集の最初の集「冬の日」がたまたま連句五歌仙と追加六句のみの集であり、発句の部を持たなかった。第四集「ひさご」も発句の部を欠き歌仙（三六句）六篇から成っている。そのために、連句連載―『抄』、発句連載―各集の評釈完本、が入り混じって事情をわかりにくくさせている。

露伴の評釈は「芭蕉研究書目」を皮切りに連句の部を歌誌『潮音』に連載し、集ごとに連句評釈がおわると順次に『抄』と名づけて岩波書店から出版した。第三集「曠野」からは連句の雑誌連載をやめ、第七集「続猿簑」の『抄』（昭5・1）で七部集の連句評釈を一段落させている。

発句評釈はその後の文業である。四年ほどの間をおいて第二集「春の日」（昭8・12雑誌『文学』）、第五集「猿簑」（昭10・11～昭12・11雑誌『思想』）の発句評釈を公にする。連句のみの第一『評釈冬の日』（昭9・9）につづいて第五『評釈猿簑』（昭12・2岩波文庫）も出版され、一種の気運があったようである。しかし、その後は雑誌発表も出版もとだえ、口述筆記による雑誌発表は敗戦色が濃くなった昭和一九年以後のことである。露伴の生前に評釈完本として陽の目をみたのは、第一『評釈冬の日』と第五『評釈猿簑』とだけであった。

露伴における〈評釈芭蕉七部集〉という現象は、大正九年・昭和八年・昭和一九年の三つに時期を分かつことができるようである。

三　視　点

いったい露伴はどのような視点に立って評釈をつづけたのであろうか。昭和二四年～二七年版の全集第二〇巻～二三巻の評釈文により、最初の評釈『冬の日抄』「木枯の巻」の冒頭（五一四字）を抜粋のかたちで要約してみよう。句読点は評釈の原文にあるもの、抜粋と抜粋との間は一字あけで示した。

尾張六歌仙　歌仙行五巻と追加と以て成れば云ふなり。　冬の日の題号に何の疑かあらん。さるを　芭蕉の脇句より　思ひ過し　古狂歌　或は然るかたもあるべし。然したゞやすらかに　解して宜しからん。

およそ百字。五分の一の要約である。このやりかたで露伴の『評釈芭蕉七部集』すべてに要約をこころみた。露伴〈文学〉における史伝考証の間口と奥行きとに備えようとしたものである。要約に際して心がけたことは次の諸点である。

①七部集の作品と文中の名称は露伴の評釈文（全集）にあるものに拠る。ただし「猿簑」は「猿簑」という表記で一貫させた。

②露伴の文章の気息を幾分でも残すように努める。例えば、露伴の意見・判断は句読点（。、）を残すことによって示すようにした。

③評釈文に出てくる固有名詞（作品名・書名・作中名・人名・地名・事項名など）は叙述順に抜き出し、重出する事項は表現の異同があれば括弧内に示す。単独で把握しにくいものには前後の語句をつける。

④連句の評釈は歌仙・百韻の各句ごとにまとめ、発句は固有名詞のみを四季などの部類別にまとめる。

次に「木枯の巻」表六句の作品と評釈の要約とを示し、露伴の評釈全体を概観する手がかりを探ってみよう。

笠は長途の雨にほころび、紙子は泊々の嵐にもめたり、わびつくしたるわび人、我さへあはれに覚えける。むかし狂歌の才子此国にたどりしことをふと思出て申侍る

狂句　木枯の身は竹斎に似たる哉（岩波新大系番号一、以下同じ）　芭蕉

仏兮湖中の一葉集　新古今集巻十五藤原定家　竹斎物語三巻　烏丸光広　伊勢物語中業平東下りのくだり十返舎一九が作の膝栗毛　狂句の二字　句中の辞として　字余りなりと　無きにあらず。されど其はあやまりなり。　狂句の一語はむしろ前書の詞につゞきて　深き義ありとも見えず。　冬の日一部の目当ての二字なり、といひ、狂句の二字は読まぬがよしなどいふは惑説なり、などいへる信濃の何丸が説は、こちたきことなり。　もつとも甲子吟行　等を拠りどころ　当らず。　扨又　狂句と断りたるは如何なればぞや。　謙退の意　おもしろからず。雖知苦斎道三　旧解甚だ陋なり、従ふに足らず。　人名　西行、荘子、墨子、義朝なんど、皆出処分明　竹斎物語　杜少陵集に眼を寓せざるの過なり。　芭蕉が尊崇せる杜甫　題して狂歌行といへり。哉　詠歎の哉　論無し。　な捨の哉　何丸の解　従ふべからず。　非なり。

誰そやとばしる笠の山茶花(2)　野水

連環　鬼貫　連句　宗鑑　守武　俳諧　この消息を知らざる者、　発句をのみ論じて、連句を云甲斐無きもののやうに思へるは、　七部集、其半は俳諧連歌なり、これを舎きて顧みざるは、心無きに近し。　とばしる　枕草子　山茶花　強解なり。　疑はしき解きざまなり。　証歌も的切ならず、云はでもあるべきことなり。

有明の主水に酒屋つくらせて(3)　荷兮

古註さま〴〵にて定説無し。　明石主水　大鏡　寺侍　従ふべからず。　京都堀川姉小路誉田屋に有明といふ名酒　これも従ふべからず。　有明村　酒屋　これ亦従ひ難し。　水がゝりの官　いよ〴〵以て従ふ可からず。　以上の諸説、解し得て的切ならんことを欲して、却って穿鑿に過ぎ、或は附会に陥りたり。　曲斎の言、正しきを得たるに近からんか。　曲斎曰く、有明の主水とは風雅なる棟梁といふまでの寓言　曲斎の言おほよそ可なり。　有明の主水はまことに寓言なり、俳言なり。明石主水　の、誉田屋の有明のといへる如きは、皆実をもつて虚を解かんとせるの失にて、其陋　なること笑を発せしむるに足る。　人名　西鶴が一代男　世之助　蛇之助　仏高力、　鬼作左、鎗弾正、逃弾正、隙間数への大将、鳴門の少将、小言幸兵衛、念仏五平　木枯の言水　白炭の忠知　ものかはの蔵人、宵待の小侍従　有明の月　第五句月の定座

頭の露をふるふ赤馬(4)　　重五

大鏡　万葉集巻十九　巻七　武庫　芝山

朝鮮のほそり芒の匂無き(5)　　杜国

ほそり芒　浅学寡聞　愧づ。　匂はにほひ　遊仙窟　万葉集　艶の字　万葉集巻十　源氏物語夕霧の巻　仙覚の万葉の抄　と古註　解に過ぎたり。　韵　沢　にほひ

日のちり〴〵に野に米を刈る(6)　　正平

鶯笠　まさに然るべし。　俗言　詩趣十分　季　季のこと、以下注せず。　古詩古人此句につきて詞づかひの説をなせるは甚だよし。

以上の事例から、どのような評釈の視点が見えてこようか。

露伴の評釈は、作品に向けた評釈のほかに前人の注解および内外の典籍・故事にわたるものが多く、ひとまず先注・典故・評釈という三つの視点が考えられる。しかし、全評釈を通観するにはなお不備がある。もう少し具体的でしかも煩雑でなく終始ぶれない視点がほしい。

まず先注については、先人について前人・旧註・古註といった漠然とした引用が目につく。その一方で露伴は名指しで曲斎・何丸・闌更ら大鏡・婆心録を俎上にあげ、しばしばそれらの注疏にむけて「笑うべし」といった冷語を発する。漠然とした引用には露伴なりの配慮があったようであるが、概して芭蕉没後の俳論には距離をおいている。それでいて注疏に学ぶ姿勢も見られる。今後の吟味のためにも先人と注疏とを区別しておきたい。

典故についても、内外の典籍と風俗上の故俗とを分けたい。内外の典籍には芭蕉生前の俳諧作品をもふくめたい。露伴によれば芭蕉は自ら語り自ら編むことが少なく、芭蕉没後の俳書・俳論の中には成立・伝承の不確かなものもあった。それら俳書・俳論はむしろ注疏に属するものである。故俗には民俗学や博物学にわたるものがあり、露伴はそれら即物面の考証にも古典籍に劣らぬ筆を費やしている。(1)

評釈については批評と解釈とに分けたい。その批評の相手も、作品と先注と両方面におよぶことがあり、批判と評価とをひとくくりにすることはできない。しかし、露伴評釈の本来の相手は芭蕉が鑑裁したとされる作品そのものにあり、批判・評価の視点は作品本位に立てるべきであろう。露伴の評釈は先人と注疎とに耳傾けながらも、芭蕉没後の俳書・俳論のさかしらを排除する体のものであった。

解釈については連句付け合いの解意と一句内の語義の釈義とに分かたれるようである。連句の運びに傍らからとやかく論議をさしはさむことはもともと野暮な作業であり、その点で露伴の野暮は、明治期以後一般に不明と

なっていた語句の釈義に大いに発揮された。句の大意についてはむしろ「解に及ばず」、淡泊であった。

以上のように見てくると、「先人・注疏、典拠・故俗、批判・評価、解意・釈義」という視点が考えられる。より簡明に「先・注、典・故、批・評、解・釈」として、四つの対からそれぞれ択一するのが実際的であろう。一句ごとに最大で四視点、歌仙三六句では一二二が上限になる。

四　実　際

この視点で実際に露伴の評釈を吟味してみよう。第四『評釈ひさご』「亀の甲の巻」の発句について、露伴評釈の視点を行文の順に示し冒頭の【　】内に掲げてみる。

雑

亀の甲烹らる時は鳴もせず（1544）　乙州

【注故釈評】旧解に曰く　呉の孫権　永康に人　一大亀　大桑樹　樹　曰く　元緒　亀曰く　樹曰く　諸葛元遜　亀曰く　樹寂として止む。　権　煮さしむ　諸葛恪曰く燃すに老桑を以てせば　乃ち熟せんと。此の故事を用ゐて句を為せりと。蓋し非なり。　桑薪烹亀の談　宋の劉敬叔の異苑に出づ。異苑十巻　僻典とは云ふべからず。　又梁の任昉が述異記にも　然れども疑ふべし。且又　句の仕立柄にふさはしからず覚ゆ。　思ふに故事の引過りなるべし。　荘子の亀の事を踏へて　仕立てたるにや。　外物篇に曰く　宋の元君　夢む　河伯　漁者余且　と。　占はしむ　これ神亀なりと。　明日余且朝す。　網白亀　献ぜよ　卜吉　乃ち亀を刳る。七十二鑽して　遺莢無し。　仲尼曰く　云々。　此亀　烹らるゝといふの事無し。　後

には終に黙す　宋亀の方を踏へたるが如く聞ゆ。但し　宋亀　烹らるゝの一語　支吾　異苑　鳴きもせずの一語　支吾　俳意　呉亀の故事　鳴きもせずと作るも可なり　宋亀の故事　烹らるゝと作るも可なり　此句は季無し　純粋の雑の句は甚だ稀なり。　観念の句　一集の色取り　宋亀の故事を踏へたりとするかた、面白かるべし。　ひさご　集の名　荘子　無季　杖つき阪　四山といふ瓢　月花も無くて　月花のこれや　偶然得たる亀鼈の類　躊躇　覚悟の死を諦めたる状を感じて此句有りたるなるべし。　暁台曰く　言外には呉亀の故事　教訓　俳諧としては妙無く　宋亀の故事　俳諧の本意　雑の句　所以にも叶ひて　ならむ。

亀の甲　古今六帖巻三　夫木集巻二十四　旧釈　端的の感を云はば　スッポン　いかもの食の曠達ぶりを其儘に現露せる俳諧なり。　泥亀　寛永あたりより　元禄　人に憚り　下手談義　江戸は柳原の長堤　煮売店　大阪　此句　傲然として　次の句の趣をも悟り知るべし。　スッポン　葡萄牙語の転訛か　説　古き　遊びの歌　「ずぼん坊」　猜知すべし。　春の季題　商へる者に問糺せるに　微しく鳴くなり　新撰六帖巻三　為兼卿　漢の焦氏易、乾之井　漢の崔媛　張平子の応閒　黿鳴鼈応　漢時の諺なる如し。　果して鳴くか鳴かざるか魚　蚯蚓　歌女　実は鳴かず、鳴くものは螻蛄　為兼卿の歌　俚諺と古歌と　即事写実の什　伴高渓の閑田耕筆巻三　亀の看経　聞きたり　すほん　其鳴声によれり　されど　説　取り難し。　田舎句合　芭蕉の判詞　為兼卿の歌を引けり。　まして長寿　当時の薬喰　蛮気ありて自然味饒く　神霊長寿　任誕不羈のをかしみあり。

露伴の評釈は改行なしで五七〇〇字をベタに組んである。おおむね「注故釈評」の順に行文が展開した最後の最後に、この発句の解釈と批評が出てくることになる。次に引く四四八字である。

禽の将に死せんとするや其声悲し、物みな命を喪はんとするに臨みては悲鳴する例なり、まして長寿を称せらゝ亀の烹らるゝに当りては定めし悲み鳴きもすべきに鳴きもせざるなり、と作りたる此句の事実は明らかに当時の薬喰をいへることながら、薬喰とも云はで、世の好ましからぬことをするに関らず、打付に亀を烹ることを云へるところ、蛮気ありて自然味饒く、且すつぽんとも云はずして、世の神霊長寿のもののやうに云做す亀と云へるに任誕不羈のをかしみあり。

この発句に付けた脇は次の句である。その脇の句に施した露伴の評釈一六五五字の、結びの部分もあわせて示そう。

たゝ牛糞に風のふく音（1545）　　珍碩

又或は曰く、（略）此句風の吹くといへるに戸外の趣を見せ、牛糞といへるは其の田舎臭くて蛮野なる境地を点出じたるまでなりと。解は浅きに似て韵は却て饒し、又是れ一箇の好解なり。

同じ箇所に最近の全註釈はどのような脚注を施しているだろうか。白石悌三・上野洋三校注『芭蕉七部集』（新日本古典文学大系70、90・3・20　岩波書店）をあげよう。同書は先注として「去来抄・七部捜・本朝食鑑・七部通旨・類船集・片言」を引き、語釈として「〇雑」「〇亀の甲」をあげ、

「斯う」に言いかける。実体は鼈（すっぽん）か。

とし、「〇鳴もせず」のあとに各句同様に一句の解釈を示している。いわく、

▽「亀は万年の齢」（謡曲・鶴亀）というが、このように煮られる時は観念して鳴きもしないの意。宮本三郎は、当時の乙州の身辺事情に関する寓意を含むかとして、元禄三年（一六九〇）六月十五日付、乙州宛芭

蕉書簡に「只々天に御まかせ破るゝ事は打破り、是非の間へ御はまり被成まじく候」とあるを引く。

七部集の注解を一冊に収めるという制約があり、簡潔ではある。しかし簡潔ながらも露伴のすっぽん説をふまえ、典籍を加え先注と諸家の説にも目をくばっている。あらためて、露伴評釈に独特な濃厚さに驚くのである。

しかし露伴には淡泊な一面もあった。短評の例を第六『評釈炭俵』「花盛の巻」名残の裏六句の場合で見よう。

売手から打て見せたるたゝき鉦（2244）　嵐雪

【解】売付けん　寄進の講がしら

ひらり〳〵と雪の降出し（2245）　利牛

【評解注】走り　ねばりを洗ふ　曲斎　拙　暁台　上手の作　暁台に与せん

鎌倉の便きかせに走らする（2246）　野坡

【批】響にはあれども

かした処のしれぬ細引（2247）　嵐雪

【解】荷造りの用

独ある母をすゝめて花の陰（2248）　利牛

【釈評】旅しての花見

まだかびのこる正月の餅（2249）　野坡

【解】こくめい平和なるさま見ゆ。

どうも露伴の評釈は集によって偏りが見られる。しかし、ここに用意した八視点はもともと個人的な査読用の

心覚えである。それを集計して七部集の三四八二句（岩波・新大系による）すべてを比較しても有意味ではあるまい。とりあえず第一集「冬の日」と他の集の歌仙一篇ずつとを比較してみよう。

『冬の日』五歌仙と「あられの巻」六句

最初の評釈、荷兮撰、尾張衆と興行、連句のみの集、歌誌『潮音』に連載、補正と批判、昭9出版。

『春の日』「伊勢詣の巻」　荷兮撰、尾張衆、昭21出版。

『曠野』「蝌取の巻」　荷兮撰、尾張衆、発句の部を優先、昭21上・昭23下。

『ひさご』「亀の甲の巻」　珍碩撰、近江集、昭22出版。

『猿簑』「初時雨の巻」　凡兆・去来撰、近江衆、昭12出版。

『炭俵』「花盛の巻」　孤屋・野坡・利牛撰、江戸衆、昭27出版（全集）。

『続猿簑』「柳の巻」　支考撰、蕉門ほか、昭27出版（全集）。

次にあげるのは、上の各歌仙に八視点を試みた結果を表にしたものである。

	先	注	典	故	批	評	解	釈	計
冬の日　木枯の巻	15	15	21	2	7	31	8	27	126
初雪の巻	20	3	14	3	3	26	14	22	105
しぐれの巻	20	5	21	4	2	28	17	17	114
炭売の巻	13	5	19	6	2	23	13	22	103

霜月の巻	12	7	13	5	0	25	20	14	96
あられの巻	2	2	2	1	0	5	2	3	17
合計	82	37	90	21	14	138	74	105	561
春の日　伊勢詣の巻	8	2	5	7	3	24	20	14	83
曠野　蝌取の巻	0	5	4	3	3	16	19	13	63
ひさご　亀の甲の巻	4	2	5	6	4	17	12	22	72
猿簑　初時雨の巻	14	6	7	8	1	28	15	20	99
炭俵　花盛の巻	7	4	5	5	9	13	17	15	75
続猿簑　柳の巻	10	1	5	2	11	12	16	17	73
合計	43	20	31	30	31	110	99	101	465
総計	125	57	121	51	45	248	173	206	1026

一歌仙三六句に四つの視点を総動員すると一二二が上限である。その点では、評釈の姿勢は第一集「冬の日」各歌仙と第五集「猿簑」「初時雨の巻」とに手厚く、他の五歌仙との間に有意差が出ているようである。全体に評・釈に及ぶことが多く、ついで解・先・典。批は第五集「炭俵」「花盛の巻」と第七集「続猿簑」「柳の巻」とに著しい。第一集「冬の日」六歌仙と他の集六歌仙とを単純に比較することはできないものの、先・典が第一集「冬の日」に多いことだけは否めない。第一集「冬の日」自体が蕉風初期の晦渋さを脱しきっていなかったせいかとも思われるが、露伴が先人と典籍とを相手どって評釈の手はじめに悪戦苦闘したことを思わせる。故俗が他

の六歌仙に多くなっていることも目につく。しかし、以上はあくまでも露伴評釈の姿勢を概観したものである。各視点に費やした執筆の量とは違う問題である。露伴の力量は注疏・典籍・釈義に傾けられていたようである。

五　典　籍

露伴がその評釈にあたって順に繰り出した古典籍と固有名詞とを概観したい。例として第三集『評釈曠野』「曠野集巻之六」をあげる。七部集を通してもっとも量が多いからである。（重出事項は表現の異同を括弧内に示した。）

年中行事哥合　清涼殿　俳諧山之井　公事根源　荷兮　年中行事十二句　供屠蘇白散　春日祭　灌仏（灌仏会）　施米　乞巧奠（棚機祭・七夕・七盃の飲・七夕の七遊）　駒引（駒迎）　撰虫　更衣　五節（の舞）　追儺（儺やらひ・鬼やらひ・節分・豆撒）　貞治五年　為秀卿（新中納言為秀）　春日（春日神社）　鹿島　三笠山　神護慶雲年中　藤氏（北家藤氏）　詞花和歌集、第九雑上　新院　皇后宮　大納言師頼　石清水臨時祭　将門　純友　東遊　加茂（の臨時の祭・祭）　定家卿（藤原定家）　泥絵御屏風　釈尊　仁明天皇　浴仏功徳経　功徳経淋水偈　枕草子、似げなきもの　端午　七種（春の・秋の・七夕の・七夕草）　万葉集、巻八　山上朝臣憶良　近江の逢坂の関　古今著聞集（巻第二十魚虫禽獣・著聞集）　嵯峨野　嘉保二年　左右馬寮　蔵人弁時範　堀川院　賀茂の社家　古註　天武天皇（浄見原）　年中行事秘抄　本朝月令　平家物語巻五　吉野宮　豊明節会（豊明）　何丸　元日　白馬　踏歌　光源氏物語（源氏物語総角の巻）　貞徳　季吟　続古今和歌集第十七雑歌上　備中国湯川　僧都玄賓　石川丈山　僧都詩并序　覆醤続集　野水

土橋利彦　拾遺愚草（員外、雑歌上・愚草・拾遺）　慈鎮和尚（慈鎮）　拾玉集（拾玉）　白氏文集（白氏・新楽府・長恨歌・白詩・楽天・流布本の）　六家集本　岩波文庫七部集　宇田氏編古板七部集　勝峯氏編　定本七部集　伊勢物語九段（伊勢物語）　山家集上、秋　新撰字鏡　晋書陶潜伝　真木柱　芭蕉　朗詠集上　藤原良経　赤染衛門　陶詩　空也（空也念仏宗）　一休和尚　（一休禅師）　鉢扣の讃　去来が鉢扣の辞　風俗文撰　水鏡　承和五年　仏名（仏名経・御仏名）　光仁天皇　宝亀五年　謡曲（実盛・花筐・杜若・鵜飼）　加賀国　篠原　斎藤別当実盛（実盛）　手塚太郎光盛（光盛）　禅閤　一条兼良　職人尽歌合　建保職人尽歌合　二条良基公職人尽歌合　甘露寺親長職人尽歌合　勧進聖職人尽歌合　一条禅閤職人尽歌合　烏丸光広卿職人尽歌合　後水尾院職人尽歌合　無名職人尽歌合　五元集　其角　此集員外　月に柄の巻　両吟歌仙　越人（越人撰の猫の耳）　傘下　半残　続猿簑　可南　露川　李夫人　漢の武帝　九華帳　反魂香　上陽人　天宝　玄宗　楊貴妃　上陽宮　業平朝臣　西施　越王勾践　呉王夫差　呂仲見の詩　王昭君　前漢元帝　毛延寿　僧李潭　陵園妾　あらのゝ集　薫の君　大君　芭蕉　釣雪　徒然草九段　一笑宛書簡　鵜　神楽歌　明治の頃　千住あたり　荘子外篇秋水（内篇大宗師・外篇胠箧）　杉風　後撰集　遍昭　唐子西の古硯銘　藤房卿　太平記巻十三・巻二十一）　北山の岩蔵　塩屋判官（塩屋・判官）　高武蔵守師直（師直）　平家　源三位頼政　菖蒲の前　侍従　早田宮の御女（其宮）　弘徽殿の西の台　紫野　狂雲集　法然上人（円光大師）　元禄十年　古今集巻第二十、神遊の部

露伴の評釈は第一集「冬の日」から、つまり連句からはじまった。途中、世相も出版事情も変わり、最晩年は口述筆記を余儀なくされた。それでは、連句と発句との間に、露伴はなんらかの手加減をしていたのであろうか。

もしくは集によって軽重をつけていたのであろうか。かりに各集について歌仙・百韻と発句の部（カギ括弧「　」で示した）ごとの要約に費やした固有名詞の字数を一行二十字として算用数字で示すと、次のようになる。

『冬の日』
木枯の巻　36
初雪の巻　36
しぐれの巻　33
炭売の巻　32
霜月の巻　17
あられの巻　六句　6
『春の日』
伊勢詣の巻　9
なら坂の巻　13
蛙の巻　12
山吹の巻　六句　2
「春」　二五句　9
「夏」　一六句　5
「秋」　一〇句　1

「冬」　七句　1
『曠野』　4
「巻之一」　九九句　14
「巻之二」　一六一句　23
「巻之三」　九一句　21
「巻之四」　六〇句　24
「巻之五」　六一句　21
「巻之六」　六〇句　59
「巻之七」　一二一句　56
「巻之八」　八二句　24
「員外」　2
帰雁の巻　13
蝌取の巻　13
春の水の巻　12
時鳥の巻　12

月に柄の巻　17
雁が音の巻　25
天つ雁の巻　29
新酒の巻　一八句　9
初雪の巻　13
冬籠の巻　7
『ひさご』
花見の巻　23
春の草　19
鉄砲の巻　10
亀の甲の巻　21
苗代時の巻　21
『猿簑』　3
「序」　3
「巻之一」　九四句　24

「巻之二」　九四句　20
「巻之三」　七六句　18
「巻之四」　一一八句　23
「巻之五」
初時雨の巻　19
夏の月の巻　5
きり〳〵すの巻　31
梅若葉の巻　6
「巻之六」
「幻住庵記」　25
「几右日記」　三五句　1
「跋」　0
『炭俵』　5
「序」　11
「上巻」
梅が香の巻　5
花盛の巻　13
空豆の巻　4
早苗舟の巻　百韵　19
「春の部」　二四句　20
「夏の部」　七一句　23
「秋」　一九句　19
「冬」　一一句　11
「俳諧の部」
秋の空の巻　三二句　18
案山子の巻　9
夷子講の巻　18
雪の松の巻　4
『続猿簑』
「続猿簑巻之上」
柳の巻　12
渡鳥の巻　6
鷹の巻　8
霜の松露の巻　9
夏の夜の巻　6
「続猿簑巻之下」
「春之部」一四〇句　44
「夏之部」　九〇句　11
「秋之部」一二二句　39
「冬之部」一一五句　16
「釈教之部」二四句　10
「旅之部」　二〇句　11

『続猿簑』「続猿簑巻の下」の「春の部」を見ても、最晩年まで露伴の気力は衰えなかった、連句と発句との間に軽重をつけず、集によって高下を設けることはしなかった、としてよいであろう。

六　考　証

露伴の考証の一端をうかがってみよう。（第一集「冬の日」「炭売の巻」初表十二句）

僧ものいはず欸冬をのむ（126）　　羽笠

【釈先典評】前句　晩春山院　欸冬は字に依りて論ずれば　俗に「ふきのとう」　薬　もの言はずの五字愚甚しく陋甚し。　欸冬の二字、邦俗読みて「やまぶき」と為す。　蓋し初は山蕗、即ち「つわぶき」　兼明親王　金棣棠花と欸冬　淆乱　和漢朗詠集　やまぶきをのむ　下ゆく水をのむ　と釈し　茶の銘　などと釈す。　花を呑み酒に臥す　雲仙雑記　旧解は皆肯ひ何しと雖も、欸冬はやまぶきと訓むべし。　旧解　良峯宗貞　素性　定家卿難題百首、橋下欸冬　此事妄談　仁明天皇崩御　此事妄談　笑ふべき妄伝なり。　されど　一条禅閤歌林良材　連集良材に　見えたり。　山吹色の衣は「くちなし」もて染むる故に　虚栗　藤匂子　呑む　懐蔵の義　無言の行　其角　嵐雪　藤匂子　張籍　賈島　此句に関することあらんなどと思ふも又非なり。

これについて露伴自身がのちに補正をしている。

冬の日抄、炭売の巻、僧ものいはず欸冬を呑む、といへる羽笠の句の解、聊か足らぬところ有りたり。（略）猶ほ其後に至りて、欸冬花を薫じて其烟を吸ふ崔知悌の療漱の法有ることを見出でたる折、閑窓寓筆の中に記して、「思想」に寄せたり。然るに又後に蓬里氏書を寄せて、淀川にふきのたうを烟草の代りに喫むことありと記せり、若くは其事にあらずや、と云へり。（略）雑の部、宗鑑が犬筑波集　たばこ法度の春の山寺　貞徳みづから注して　当世　煙草の代にのむ故なり　蕗のたうをのむとなすを正しとすべし。但し

欸冬は音読すべし。　欸冬は畢竟やまぶきと訓むべしと　いへるは削るべし。（「冬の日補正」昭2・6）

文中の「閑窓寓筆」は大14・2・1『思想』に発表されている。文中の逢里氏については明らかでない。[2]「新大系」の脚注は露伴の補正にしたがった上で別に、「僧房ニ逢着ス欸冬花」（三体詩・賈島ニ逢フ）を引き、禅語「欸冬ヲ呑ム」を伝えている。

元日の木の間の競馬脚ゆるし（302）　　重五

これは第二集「春の日」「春」の発句。露伴は、「元日・競馬・脚ゆるし」の取り合わせに首をひねり、典籍を引き釈義の考証をくりひろげる。第四集「ひさご」「亀の甲の巻」の次のような場合は、考証の度がすぎて悪文になっているのではあるまいか。論旨をたどるために仮にaとbと記号をそえてみた。

小歌そろふるからうすの縄（1547）　　探志

【釈故典】aからうすは碓なり、bたううすは磑なり両者相混じて、判別しがたし。此句のから臼　a碓なりやb磑なりや。前人はa碓なりと謂へり。　a碓はa米搗臼　稀には力綱に縋りて　有れども　大抵は足　杵　下し　上ぐるなり。さればa碓を　もて　此句のからうすと為すときは　からうすの縄　a力縄なり。又b磑は普通bすりうす　b磑をからうすといふところも有りて　日本百科辞典の如きは　からうすを釈するにb磑龍縄　二人対座　b磑に縄常の事　籾ずり歌　されば　句の上より　云へば　句中のからうすはa搗臼にはあらで　bすり臼　甚だふさはし。言葉の上より云へば　（辞典の如き解　有るにはせよ）a碓　宜しとすべく　姿致の上より云へば　（米搗歌　有るにはせよ）　b磑　宜しかるべし。　a碓かb磑か　つき臼かすり臼　か　いづれとも断じがたし。続猿簑　沾圃　aふみ臼なること分明　此句のからう

す　は不分明なり。　かゝる時は、a碓もしくはb磑、もしくはb礱の字の下しあらばと思はる。　言葉の混淆　西鶴の作といはるゝ　新小夜嵐に　が見えたり。　句の小歌　からうす　はa踏臼可なるべきも　小歌bそろふる　未だ当らず思はる。但し籾ずりは秋の季　曠野　季より論ずれば　おほよそ秋　次の三句秋季なれば　決めがたし。

露伴の評釈の読みとりにくさは、先注の書名を明示しないことにもある。

古注何丸　鶯笠　別解　何丸一書　鶯笠曲斎　古来の諸家　古解　大鏡　大鑑　古註　旧伝旧解の一　旧説

前人　升六

など、入り乱れる。由来のはっきりしない雑書を選り分けながら独力で踏み分け道を進む露伴にとって、七部集以後の俳論の類は「古来の諸家」で間に合わせたかったのかも知れないが、この呵責なさはいずれ当人にはねかえる。

その一方で音曲について露伴は、ほとんど偏執的な考証を展開する。「発句月花の初は琵琶の木とり哉」（第三集「曠野」「巻之二」477）の一三四〇字、「唱歌は知らず声ほそりやる」（同「新酒の巻」1353）の九二九字、また「すがゝき習ふ比のうき恋（同「初雪の巻」1373）」の九八九字、「冬籠の巻」「さきくさや正木をひきに誘ふらむ（同1402）」の一一〇九字などなど。

風呂については音曲を上まわる。「風呂の加減のしづかなりけり」（第四集「ひさご」「亀の甲の巻」1551）の三二二字、「あつ風呂すきのよひ〳〵の月」（第五集「猿簑」「きり〳〵すの巻」2083）の五〇一四字など、連句本来の運びを忘れたかと思わせるほどであり、茶の風炉と風呂・湯とについて蘊蓄を傾ける。

人名についての関心も見逃せない。一例として「広沢やひとりしくるゝ沼太郎」（第五集「猿簑」「巻之一」1621）をあげておく。露伴には「当流人名辞書」（明33・6・25、7・25、8・25『新小説』）の作があったのである。「番匠が椴の小節を引かねて」（第六集「炭俵」「夷子講の巻」2714）は小説『五重塔』の番匠たちを思い起こさせるものであろう。

古典文芸の先人に寄せる敬愛にも注意したい。たとえば「春野吟　足跡に桜を曲る庵二ツ」（第二集「春の日」「春」320）あるいは「花と散る身は西念か衣着て」（第五集「猿簑」「きり〳〵すの巻」2086）は西行、「弁慶坊をとぶらふ　すゞかけのしでゆく空や衣川　」（第二集「春の日」「夏」332）は弁慶。ことに批評と解釈がていねいである。

露伴は後人の意見にも耳を傾けていた。頴原退蔵（1488）・小宮豊隆（2077）・土橋利彦（843・1580）の説を紹介している。しかし行蔵が不透明だとする俳人、とくに支考・許六らには『荘子』の寓話をもって冷罵するなど、仮借がなかった。

評釈作業に先立つ「芭蕉研究書目解説」（大9・1）からして、「古来七部集の中に入れ来たれば、佳集ならずとも」という姿勢であった。第四集「ひさご」「春の草の巻」における「色々の名もむづかしや春の草　珍碩」（1472）でも評釈の筆がそれて支考らを批判していたが、晩年の第七集「続猿簑」は冒頭から支考・許六の非を鳴らしてやまない。序で十箇条にわたって「続猿簑」偽書説を説きたて、「霜の松露の巻」では「猿簑にもれたる霜の松露哉」（2892）あるいは「鴨の油のまだぬけぬ春」（2927）にかみつき、発句の「秋」では「飛入の客に手をうつ月見哉」（3227）、最後の「旅」の終わり近くでは「十団子も小つふになりぬ秋の風」（3472）の許六をの

のしっている。しかし第七集「続猿簑」最後の句「宿かりて名をなのらするしくれかな　はせを」(3482)では、

天下太平四恩沢々、一集これを以て終る。

と結んだ。このような曲折をへて、第七『続評釈猿簑』完本は露伴没後の昭和二七年二月に出版された。

以上のささやかな吟味から、露伴の七部集評釈について概観してみよう。

第一に、荷兮・支考・許六、俳論書への評価がきびしい。「去来抄」なども例外ではない。

第二に、子規以来の風潮とは違い、連句優先の姿勢を通している。

第三に、各集で評価に差があり、第一集「冬の日」と第三集「曠野」、第五集「猿簑」に力を費やしている。

第四に、私撰集とくに夫木集、歌合とくに職人歌合、歌書・説話集・物語・謡曲・稗史を使い込んでいる。

第五に、本草・故俗・音曲・風呂・釣り・水辺の趣味などに執する傾向がある。

第六に、『和名抄』『新撰字鏡』等を参照し、考証に独特の粘りをみせ、連句の運びあるいは行文の流れを顧みないことがある。

第七に、発表の場ははじめ短歌雑誌『潮音』、のち雑誌『文学』『思想』にうつった。

第八に、晩年の口述筆記にも叙述の気力が持続し、時には詩心を披瀝しており、好悪の振幅がきびしい。

以上の検討から、芭蕉受容史に果たした短歌雑誌『潮音』という存在、露伴に芭蕉七部集評釈の事業を思い立たせた短歌雑誌『潮音』の意義がここに立ち現れてくる。露伴自身にとっても、芭蕉とのかかわりは『潮音』以前と『潮音』以後とに分かたれるようである。

七　『潮音』以前

露伴の芭蕉受容史は古い。露伴あるいは蝸牛庵という雅号は「突貫紀行」上京（明20・9）の頃にさかのぼり、『奥のほそみち』の郡山付近で野宿したことに由来する。淡島寒月の導きで元禄文学とくに西鶴に親しんだが、露伴は西鶴から芭蕉へ視線をうつしている。[3] 第一作の小説『露団々』（明22・2・17『都の花』）は芭蕉の発句を各節の表題に配している。以下、『評釈芭蕉七部集』関連の事項を省き、露伴の俳諧にかかわる年譜を掲げよう。

露伴年表・俳諧関係

一椀の茶を忍月居士に侑む	明23・4・30	『読売新聞』
地獄谷日記	23・6・30〜7・15	『城南評論』6月号
雑詠（六首・三首・一篇）	7・21	『読売新聞』
地獄谷書簡（逍遙あて）	7・21〜23	『郵便報知新聞』「造化と文学」
赤城山奥地獄谷より	7・23	『読売新聞』
芭蕉と其角	10・23	『国民之友』
山口素堂	25・5・21	『城南評論』
蝸牛庵俳話	44・4・1	『俳味』
川柳と蚊	大1・10・1	『女学世界』
瓊音句集　評	2・5・1	沼波瓊音『瓊音句集』（新潮社）
芭蕉俳句研究（一）	10・1・1	

〜（四十二）　〜13・7・1　『潮音』露伴・阿部次郎他

芭蕉と杜国の一面　10・8・1〜9・1　『潮音』

序文　12・5　沼波瓊音編『芭蕉全集』（岩波書店）

『芭蕉俳句研究』（岩波書店）　11・9・25　太田水穂他

虚子宛書簡　13・8・1　『ホトトギス』

かりに明治二十年代以降の芭蕉俳諧受容の動向を顧みると、大略次の四つの動きがあったようである。露伴はその④の位置にいたことになり、七部集評釈までは表だった動きをしていなかったことになる。

①旧派の俳諧師たち[4]（老鼠堂永機・春秋庵幹雄ほか）

②秋風会・筑波会[5]（大野洒竹・佐々醒雪・笹川臨風・尾崎紅葉ほか）

③新聞『日本』の周辺[6]（天田愚庵・桂湖村・正岡子規・高浜虚子・夏目漱石・藤井紫影（乙男）・河東碧梧桐・内藤鳴雪・寒川鼠骨・柴田宵曲・松根東洋城・荻原井泉水・大須賀乙字ほか）

④文学者（「根岸党」幸堂得知・饗庭篁村・幸田露伴ほか、『文学界』北村透谷・島崎藤村、内田魯庵[7]ほか）

八　『潮音』以後

短歌雑誌『潮音』は大正四年七月に太田水穂・若山牧水宰合同の同人誌として発足したが、大正九年当時は水穂主宰になっていた。水穂自身は雑誌『文学界』によって芭蕉に心をひかれ大正五年の頃から蕉風俳諧に学びだしたといわれる。この辺の事情は太田水穂『芭蕉連句の根本解説』限定復刻版（66・2・15、名著刊行会）に付

した嗣子太田青丘の「解説」に詳しいので、少々長くなるが引用しよう。

しかも水穂の芭蕉研究に画期的意義をもつものは、大正九年十一月、幸田露伴、沼波瓊音、阿部次郎、安倍能成の諸氏（後、小宮豊隆、和辻哲郎、勝峯晋風の三氏参加）と芭蕉研究会を開き、毎月一回、同会の提唱者たる水穂の家（田端二田荘）に合評会を催し、その筆記を水穂の主宰する歌誌「潮音」に連載したことである。

瓊音は芭蕉研究ですでに一家をなしており、露伴は紙上参加で総評の形をとった。合評記録は出版された。

『芭蕉俳句研究』（大11・9・25、86・9・4第九刷　岩波書店）

『続芭蕉俳句研究』（大13・7・5、86・9・4第三刷　岩波書店）

『続々芭蕉俳句研究』（大15・5・15、86・9・4第二刷　岩波書店）

大正五年十二月に漱石没、その後の門下生の動向であった。ひきつづき同「解説」を引く。

なおこの芭蕉研究会は、大正十三年後半より大正十四年にかけて、芭蕉の連句に進んだが、小宮、阿部両氏の東北大学赴任のために終止し、これは実質的に小宮、阿部両氏を含む東北大学の諸氏による芭蕉俳諧研究に引き継がれた形となった。

かゝる雰囲気のうちに芭蕉研究会のメンバーの間に、芭蕉連句に対する関心も急速に高まって行ったので、露伴氏は大正十三年一月より潮音誌上に「冬の日抄」を連載し、小宮氏も数種の芭蕉研究を出され、水穂また自らの芭蕉俳諧研究（大正十年七月より大正十四年まで毎月潮音誌上に連載、大正十五年岩波書店より芭蕉俳諧の根本問題として刊行された。

すなわち『芭蕉俳諧の根本問題』（大15・4、岩波書店）であり、『芭蕉連句の根本解説』（昭5・11、岩波書店）である。水穂の妻の四賀光子は傍聴者として出席、風雨などで出席者少数のときは発言に加わった。なお、合評会の記録係は当時東京帝国大学の医学部学生であった山下秀之助がつとめた。山下はのち札幌に赴任した。東北帝国大学の研究には山田孝雄・岡崎義恵・太田正雄（木下杢太郎）が加わっていたことも添えておこう。

瓊音・晋風の参加、「露伴先生」の存在感はそれとして、歌誌『潮音』の役割は大きかった。以上の動きに一般読者層、とくに文学者の動向を加えれば、大正十年代の芭蕉受容の大勢はほぼ押さえたことになるだろう。

すなわち次の文学者たちである。芥川龍之介[8]「芭蕉雑記」（大12～13）・「続芭蕉雑記」（昭・7）、島崎藤村「芭蕉のこと」（大14・1、昭7・8）、久保田万太郎・久米正雄（三汀）・佐藤春夫・室生犀星「芭蕉襍記」（昭3）、そして母方の遠祖が芭蕉だったとする横光利一[9]――。

ただし関西は蓑虫庵・義仲寺・落柿舎など芭蕉ゆかりの故地である。京都帝国大学の藤井乙男（紫影）をはじめ『日本』派・筑波会以来の実作・研究の士が多い。その中から露伴の芭蕉評釈に対して批判がおこった。すなわち樋口功『芭蕉の連句』（大15・11・20成象堂）がそれである。樋口はすでに『芭蕉の連句』（大12・6・25文献書院）・『選評芭蕉句集』（大14文献書院）を公にしており、露伴の蕉風連句観には承服しかねたようである。

旧注及び最近往往試みらるる解説の大部分、就中幸田露伴氏の冬の日抄の所説の類は、予の見る所を以てすれば、客観的乃至概念的連鎖に重きを置けるものなれば、蕉風の根本義に反すとの所信より随所之を弁駁せり。

また、次にいう「某先生」とは露伴のことであり、露伴の『冬の日抄』のじつに七十箇所にちかく異議申し立

てをしている。すなわち蕉風の画期と匂付けは「野ざらし紀行」、第一集「冬の日」にはじまるとするものである。

最近某先生冬の日を注せる一書を著して世に布く。（略）後一書として世に出でしを通読するに至り、更に少なからず失望せり。（略）若し此の類の解釈のみが永く世に定説視さるることとならば、予の私に信ずる真義は容易に世に顕るべき期無からむを思ひ、遂に強ひて励まして此の一書を草せり。（一、序説）

樋口の意見には聞くべきものがあり、いまさら露伴に成り代わっていちいち反論することはない。しかし、ことさらに異を唱え、あえて別の典拠を繰り出している感じがないではなく、むしろ第一集「冬の日」・第五集「猿簑」だけでなく第二集「春の日」以下について、蕉風の変化を跡づける具体的な注釈を仰ぎたかった。露伴の評釈にもその後変化が見られる――。架蔵の『芭蕉研究』は当時よほど読み込まれたものらしく、詳細な書き込みが入っている。伊藤正雄『俳諧七部集芭蕉連句全解』（昭51・4・20河出書房新社）は『芭蕉研究』を、「芭蕉伝記の実証的研究に一つのエポックを画した良著であった」とし、「反露伴的立場を表明した注釈」という。

匂付けに執する余り、句意の連関を無視し過ぎるきらひがあったが、蕉風俳諧の解釈に匂を重視すべきことを啓蒙した功績は大きい。

露伴の『評釈芭蕉七部集』はその圧倒的な重量感で後進の可能性を封じるおそれがあった。樋口の苛立ちがそこにあったのかも知れない。伊藤は露伴の評釈について「博覧強記一世に冠絶したこの文人が、晩年約三十年間心血を注いだ労作」と評し、「七部集研究史上の一大金字塔」と言いきる。しかし反面ではその欠点として、繁簡宜しきを得ず、無用の詮索に陥り、『婆心録』流の心付けに解釈したりする傾向をあげる。彼の権威、加えて

必要以上に難解な文語文も、難点になったとする。すでに文芸学が新進の学風として注意される時代であった。樋口批判以後、露伴は、敬して遠ざけられたのである。

結局、『潮音』以後の露伴は独自の道を踏み分けることになる。以後の年譜をたどろう。

俳句（十八句）	14・3・15	『柳屋』
淡島寒月氏	15・4・1	『早稲田文学』
俳諧に於ける小説味戯曲味	9・1	『中央公論』
沼波武夫氏を悼む	昭3・2・11	『噫瓊音沼波武夫先生』（瑞穂会）
『露伴全集』全十二巻	4・11・5	
	～5・11・25	岩波書店
序	8・2・24	服部畊石『俳句文法』（宝文館）
子規に関し露伴翁に聴く	10・1・1	『俳句研究』（碧梧桐記）
淡島寒月のこと	13・7・5	「友を語る」『大阪毎日新聞社』（東京日々新聞発行所）
序	15・11・10	菊山当年男『はせを』（宝雲社）
俳諧字論	18・10・1	『文学』
「俳諧」？	9・5	『現代俳句』
蝸牛庵句集（三三三句）	11・30	

露伴俳句研究（四十一句）　24・3・1
『蝸牛庵句集』　8・15　中央公論社
『露伴全集』全四十巻、別巻　11・30～33・7・25　蝸牛会編纂　岩波書店
蝸牛庵句集補遺（三十四句）　28・6・1　『俳句』
子規の転機に関わる二書簡　50・3・18　『子規全集』「別巻一」（講談社）
『露伴全集』　岩波書店
「第二十巻」～「第二十三巻」　54・2・19～3・19～3・19～4・18
「別巻上」　55・2・18　谷沢永一・肥田皓三・浦西和彦編纂
「別巻下」　3・28　谷沢永一・肥田皓三・浦西和彦編纂

雑誌『潮音』に拠った沼波瓊音・太田水穂・幸田露伴らの営為は、しかし継承された。尾形仂『芭蕉・蕪村』はその冒頭で、つぎのように追懐する。「芭蕉――文学と研究――」の「二　芭蕉研究の歩み――青春の追憶」（岩波現代文庫　学術15、00・4・14岩波書店、初出は昭53・12・20花神社版）

一九四二（昭和十七）年、藤井乙男博士を会長、石田元季・岡崎義恵・沢瀉久孝・小宮豊隆・志田義秀・新村出・高木市之助・久松潜一の諸氏を賛助会員として、穎原退蔵博士を中心に結成された芭蕉研究会の機関誌『芭蕉研究』の第一輯が大阪の靖文社から刊行された。

正岡子規・内藤鳴雪・荻原井泉水・勝峰晋風氏ら俳人たちや、内田魯庵・幸田露伴らの作家の手によって

進められてきた仕事の後を承け、沼波瓊音・樋口功氏らを先駆に、『万葉』や『源氏』などの場合よりもはるかに遅れて学者の手により鍬を入れられるようになった芭蕉を対象とする文学研究が、このとき初めて一つの機関に結集されたわけである。それがあたかも太平洋戦争の戦雲急を告げんとする時期、そしてまた『古事記』や『万葉集』をふりかざしての声高な古典論の横行する時期にあたっていたことが、改めて注目されなければならない。

歌誌『潮音』連載のころ芭蕉研究に入った研究者たちが、昭和八・九年ごろから発言をおこし、露伴が評釈の完成を急いでいたころ、学会を形成する。露伴は敬遠され、黙殺され批判されることで継承されたのである。『俳諧評釈』（昭22・8・10）に先立つ柳田国男の発言も無視できまい。[10]

昭和十七年以降の文学者の芭蕉享受について一瞥しよう。露伴の近親者では、高木卓・幸田文が露伴に俳諧の手ほどきを受けており、斎藤茂吉が其角の句の解を露伴に問うている。[11] いわゆる「日本浪曼派」の時期にもあたっており、保田与重郎『芭蕉』（昭18・10・21新潮社）は関西在俗の立場から西欧文芸学をいさぎよしとしない姿勢を通している。[12] 山岸外史『人間芭蕉記』（昭17）・山口諭助『美の日本的完成「寂び」の究明』（昭17）・平泉澄『芭蕉の俤』なども世に出ており、大西克礼『風雅論』（昭15）も芭蕉俳諧にかかわるものであった。後年「芭蕉庵桃青」（昭41・11～『中央公論』）を断続連載することになる中山義秀の資料渉猟はすでにこの時期はじまっていた。[13]

九　露伴における意義

顧みれば、露伴の雅号がすでに芭蕉俳諧の『奥のほそみち』に地縁を持つものであった。創作面でいえば、『いさなとり』や『風流微塵蔵』には旅の局面から局面へという連歌に似た展開があり、評釈に際してそれらの職種・故事・風俗に関する造詣が動員されたことであろう。俳諧にゆかりが深い西行説話については「二日物語」(明31・2、明34・1『文芸倶楽部』)などの先行作品がある。連句の連環形式については、第一集「冬の日」評釈の早々、「木枯の巻」脇(2)でのべており、後年の「連環記」や『蝸牛庵聯話』がそこに暗示されている。第六集「炭俵」「雪の松の巻」名残の表二句目「背戸へまはれば山へ行くみち」(2767)には小説「雁坂越」(明36・5・10『新小説』)の主題が思われよう。長篇詩『心のあと　出廬』以来、音曲への関心と詩心とは当然あったことであろうが、ここでも繁簡よろしきをえない寄り道が災いした。先注に放った痛罵は小説『五重塔』(明24・11・7〜明25・4・19『国会』)の末尾近い飛天夜叉王の嘲罵咆哮に通う口気を思わせる。その気力がおそらくは『音幻論』と『評釈芭蕉七部集』とを国歩艱難の日に並行して口述させ出版させたものと思われる。その事実だけは心ある者の記憶に、たぶん残ることであろう。

注(1)　露伴の考証は文芸性をそこねるものとしてむしろ厭われたが、近年の労作として曽良と吉川神道、白河付近の地誌、旅の経理面にかかる次の三著をあげたい。

岡田喜秋『旅人・曽良と芭蕉』(91・12・10、河出書房新社)「〔付録1〕曽良『近畿巡遊日記』」「〔付録2〕曽良『随行日記』末尾」

横井　博『ふくしま奥の細道』（ふくしま文庫⑱、昭50・12・10、〈企画・編集〉福島中央テレビ）
金丸敦子『芭蕉はどんな旅をしたのか　「奥の細道」の経済・関所・景観』（00・10・20、00・11・25二刷、晶文社）

（2）久保田万太郎の小説「うしろかげ」（昭24・12～昭25・6『改造文芸』）に旧派の俳人として春待居の主人、堀蓬里が姿をみせるが、偶合であろうか。蓬里のモデルは雪中庵を継いだ増田龍雨とされている。

（3）山口昌男『「敗者」の精神史』（95・7・21、岩波書店）「3　軽く、そして重く生きる術――淡島椿岳・寒月父子の場合（一）」「4　明治大正の知的バサラ――淡島椿岳・寒月父子の場合（二）」「敗者たちの生き方」
淡島寒月『梵雲庵雑話』（岩波文庫　緑159－1、99・8・18、岩波書店）

（4）秋尾敏『子規の近代　―滑稽・メディア・日本語―』（99・7・3、新曜社）「Ⅰ子規の文学」「3露伴の目」「4『月の都』」「5『三人物語』」「Ⅱ明治の俳諧」

（5）『紅葉全集』（第9巻　94・9・21、岩波書店）

（6）斎藤卓児『愚庵の研究』（昭59・3・8、斎藤光）
湯本喜作『愚庵の世界』（昭42・12・10、短歌新聞社）
中柴光泰『明治の秋霜－愚庵をめぐる新聞人－』（昭48・11・20、光伸舎出版）
『季刊　子規博だより』（VOL 2・4）「館蔵資料紹介7　宝来淑子「月の都」をめぐる三書簡」（p.18）

（7）内田魯庵「芭蕉庵桃青」「芭蕉後伝」（『内田魯庵全集』第二巻／文芸評論・研究Ⅱ　編者野村喬、昭61・4・24、講談社）

(8) 中田雅敏『芥川龍之介――小説家と俳人』(00・11・30、鼎書房)

(9) 『横光利一全集』第十五巻(校訂栗坪良樹、昭58・4・30、河出書房新社)「考へる蘆」・「芭蕉と灰野」(昭10・7・10『馬酔木』第14巻第7号)・「季節」(初出未詳)「満目季節」(昭12・4・1『馬酔木』第16巻第4号)

(10) 『柳田国男全集』第17巻(99・2・25初版第I刷、筑摩書房)「俳諧評釈」(p.1〜p.216)

(11) 『保田与重郎全集』第十八巻(昭62・4・15、講談社)「子規」「要心録」「芭蕉」漱石門下の文人哲学者たち(p.110)・小宮豊隆氏などといふ東北の文芸学の仲間で(p.268、「芭蕉」昭18・9)・芥川龍之介、この小宮氏の亜流(「芭蕉」p.280)

(12) 斎藤茂吉『幸田露伴』(昭24・7・20、洗心書院)(p.159)

(13) 中山義秀『芭蕉庵桃青・テニヤンの末日』(新潮現代文学15、昭56・4・15、新潮社)

参考文献

『芭蕉全図譜』全二冊[図版編][解説編](芭蕉全図譜刊行会、〈監修〉大谷篤蔵〈編集〉石川真弘・上野洋三・加藤定彦・雲英末雄・今栄蔵・櫻井武次郎・白石悌三・野田千平・堀信夫・森川昭、93・11・29、岩波書店)

『新芭蕉講座』[第一巻 発句篇[上]][第二巻 発句篇[中]][第三巻 発句篇[下]]頴原退蔵・加藤楸邨・矢島房利[第四巻 連句篇[上]]頴原退蔵・山崎喜好 [第五巻 連句篇[下]]樋口功・杉浦正一郎 [第六巻 俳論篇]小宮豊隆・能勢朝次 [第七巻 書簡篇]今栄蔵 [第八巻 紀行文篇]小宮豊隆・横沢三郎・尾形仂 [第九巻 俳文篇]石

田元季・市橋鐸・杉浦正一郎・久富哲雄（95・8・1、三省堂）
『芭蕉の本』「1作家の基盤　中村幸彦編」（昭45・8・10）「2詩人の生涯　加藤楸邨編」（昭45・4・20）「3蕉風山脈　尾形仂編」（昭45・7・10）「4発想と表現　角川源義編」（昭45・6・10）「5歌仙の世界　山本健吉編」（昭45・11・10）「6漂泊の魂　井本農一編」（昭・10・10）「7風雅のまこと　小西甚一編」（昭45・9・10、角川書店）
『校本芭蕉全集』（監修小宮豊隆）「第一巻　発句篇（上）」校注阿部喜三男　補訂堀信夫（昭63・10・31）「第二巻　発句篇（下）」校注荻野清・大谷篤蔵（昭63・12・30）「第三巻　連句篇（上）」校注大谷篤蔵・木村三四吾・今栄蔵・島居清・富山奏（平1・1・30）「第四巻　連句篇（中）」校注宮本三郎（平1・2・28）「第五巻　連句篇（下）」校注中村俊定（平1・3・31）「第六巻　紀行・日記篇　俳文篇」校注井本農一・弥吉菅一・横沢三郎・尾形仂（平1・6・30）「第七巻　俳論篇」校注宮本三郎・井本農一・今栄蔵・大内初夫（平1・7・31）「第八巻　書簡篇」校注荻野清・今栄蔵（平1・9・30）「第九巻　評伝・年譜・芭蕉遺語集」著者井本農一・久富哲雄・荻野清・今栄蔵・赤羽学（校注）（平1・10・30）「第十巻　俳書解題・総合索引」編者島居清・久富哲雄（平2・2・28）「別巻　補遺篇」編者井本農一・大谷篤蔵　阿部正美・堀切実・島居清（校注）・井本農一・弥吉菅一（校注）・尾形仂（平3・11・30、富士見書房）
久富哲雄監修『芭蕉研究資料集成　明治篇全9巻』（92・6・25、クレス出版）
［伝記・俳論1・2・3］（略）［作品研究1］内藤鳴雪『春秋芭蕉俳句評釈』（明37、大学館）内藤鳴雪『秋冬芭蕉俳句評釈』明37、大学館）「作品研究2」角田竹冷『芭蕉句集講義　春、秋之巻』（明41、42、博文館）「作品研究3」角田竹冷『芭蕉句集講義　秋、冬之巻』（明43、大4、博文館）［作品研究4］桃支庵指直『俳諧猿簑附注解合』（明20、矢部禎蔵）俳仙堂碌々翁『俳諧炭俵集注解』（明30、棚橋五郎）内藤鳴雪『七部集俳句評釈』（明38、大学館）［作品研究5］楠蔭波鴎

『俳諧七部集講義　上、下』（明26、米田ヒナ）［作品研究6］（略）

久富哲雄監修『芭蕉研究資料集成　大正篇11巻』（93・6・25、クレス出版）

［伝記・総記1・2・3・4］（略）［作品研究1］寒川鼠骨『続芭蕉俳句評釈』（大2、大学館）沼波瓊音『芭蕉句選講話春之巻』（大3、東亜堂書房）［作品研究2］半田良平『芭蕉俳句新釈』（大12、紅玉堂書店）［作品研究3］小林一郎『芭蕉句集評釈』（大13、大同館書店）［作品研究4］樋口功『選評芭蕉句集』（大14、文献書院）樋口功『芭蕉の連句』（大15、成象堂）［作品研究5］小林一郎『七部集連句評釈』（大11、大同館書店）［作品研究6・7］（略）

久富哲雄監修『芭蕉研究論考集成　第一巻　芭蕉特輯雑誌集　大正7年～昭和一五年』（99・12・25、クレス出版）

『石楠』（大7第3号　芭蕉研究号　8家）、『潮音』（大10・8　芭蕉号　7家）、「にひはり」（大13・11　特輯芭蕉号12家）、『早稲田文学』（大14・10号　芭蕉研究号　6家）、『早稲田文学』（大14・10号　続芭蕉研究　3家）、『コギト』（昭10・11月号　芭蕉特輯　15家）、『俳句研究』（昭11・1月号　「芭蕉」特輯　30家・19家）、『国文学解釈と鑑賞』（昭11・9月号　特輯芭蕉の研究　5家）、『古典研究』（昭12・8月号　特輯芭蕉研究第一輯　17家・諸家・編輯局）、『文学』（昭13・4月号　特輯俳諧研究　4家）、『古典研究』（昭13・4月号）、『国文学解釈と鑑賞』（昭15・3月号　特輯芭蕉時代俳句の観賞　14家）

幸田露伴『評釈　猿簑』（岩波文庫　緑12-10、37・2・5第1刷、91・3・7第8刷　岩波書店）

沼波瓊音・太田水穂・阿部次郎・安倍能成・小宮豊隆・和辻哲郎・幸田露伴『芭蕉俳句研究』（大11・9・25、86・9・4第九刷、岩波書店）

幸田露伴・太田水穂・沼波瓊音・阿部次郎・安倍能成・小宮豊隆・勝峯晋風・和辻哲郎『続芭蕉俳句研究』（大13・7・

5、86・9・4第三刷、岩波書店）
幸田露伴・太田水穂・沼波瓊音・阿部次郎・安倍能成・小宮豊隆・勝峯晋風・和辻哲郎『続々芭蕉俳句研究』（大15・5・15、86・9・4第二刷、岩波書店）
阿部正美『芭蕉連句抄』（四・六・八・十・別巻、昭51・5・25、昭54・11・10、昭56・11・20、昭62・9・30、明治書院）
島居清『芭蕉連句全註解』11冊（昭54・6・30～昭63・3・1、桜楓社）
伊藤正雄『俳諧七部集　芭蕉連句全解』（昭51・4・20、河出書房新社）
岩田九郎『諸注評釈芭蕉俳句大成』（昭42・7・1、平3・8・20五版、明治書院）
白石悌三・上野洋三校注『芭蕉七部集』（新　日本古典文学大系70、90・3・20　岩波書店）
中村俊定校注『芭蕉七部集』（ワイド版　岩波文庫91・12・5、岩波書店）
『松尾芭蕉集1　全発句』（新編古典文学全集　第一期、注解井本農一・堀信夫、95・7・10、小学館）
『松尾芭蕉集2　俳文編連句編』（新編古典文学全集　第一期、校注訳井本農一・松村友次、久富哲雄・堀切実、小学館）
安東次男『芭蕉連句評釈』上下（講談社学術文庫1106・1107、93・12・10、94・1・10、講談社）
安東次男『芭蕉発句新注　俳言の読み方』（86・10・25、筑摩書房）
安東次男『風狂始末　芭蕉連句新釈　付別冊　芭蕉七部集評釈（抄）』（86・6・30、筑摩書房）
安東次男『続風狂始末　芭蕉連句新釈』（89・7・20、筑摩書房）
堀切実編注『蕉門名家句選（上）』（岩波文庫　黄259－1、89・7・17第1刷、99・7・5第2刷、岩波書店）『蕉門名家

句選（下）』（岩波文庫　黄259－2）89・9・18　第1刷、99・7・5第2刷、岩波書店）
『俳文学大辞典』（尾形仂・草間時彦・島津忠夫・大岡信・森川昭、平7・10・27、角川書店）
乾裕幸『周縁の歌学史―古代和歌より近世俳諧へ』（平1・6・15、桜楓社）
小西甚一「芭蕉と寓言説」（『日本学士院紀要』第18巻第3号）
『芭蕉』（増補国語国文学研究史大成12）井本農一・栗山理一・中村俊定（昭34・12・5初版、昭52・3・1増補初版、全国大学国語国文学会、明治書院）
今栄蔵『芭蕉年譜大成』（平6・6・10、角川書店）
上野洋三『芭蕉論』（昭61・10・5、筑摩書房）
尾形仂『芭蕉・蕪村』（岩波現代文庫　学術15、00・4・14、岩波書店）
尾形仂『日本詩人選17　松尾芭蕉』（昭46・3・25、昭51・5・10、筑摩書房）
『シンポジウム日本文学8　芭蕉』〈出席者〉尾形仂（司会者）・那珂太郎・堀信夫・外山滋比古・平井照敏・山本健吉（昭51・5・10、学生社）
『潁原退蔵著作集　第十六巻近世語研究』（昭55・1・10、中央公論社）
中村幸彦『宗因独吟俳諧百韻評釈』（平1・9・10、富士見書房）
雲英末雄編『芭蕉連句古注集　猿簑篇』（昭62・12・7、汲古書院）
村松友次・谷地快一編『猿みのさがし』（笠間選書60、昭51・9・30、笠間書房）
柴田宵曲『俳諧随筆　蕉門の人々』（岩波文庫　緑106－2、86・1・15第1刷、94・10・17第5刷、岩波書店）

柴田宵曲著・小出昌洋編『俳諧随筆　蕉門の人々』（岩波文庫　緑106－4、99・1・18、岩波書店）
柴田宵曲『古句を観る』（岩波文庫　緑106－1、84・10・16第1刷、99・4・16第12刷、岩波書店）
竹内玄玄一著・雲英末雄校注『俳家奇人談・続俳家奇人談』「人名索引」（岩波文庫　黄250－1、87・10・16第1刷、94・9・16第2刷、岩波書店）
広田二郎『蕉門と『荘子』』（昭54・2・20、有精堂出版）
広田二郎『芭蕉と古典――元禄時代』（昭62・3・25、有精堂出版）
金谷治訳注『荘子』第一冊［内篇］・第2冊［外篇］・第三冊［外篇・雑篇］・第四冊［雑篇］（岩波文庫青206－1～4）71・10・16第1刷、93・12・6第35刷～83・2・16第1刷、93・10・15第16刷、岩波書店）
鎌田正『春秋左氏伝　一～四』（新釈漢文大系30～33、昭46・10・25～昭56・10・20、明治書院）
吉田賢抗『史記　一～七』（新釈漢文大系38～41、昭48・2・20～昭57・2・10、明治書院）
水沢利忠『史記　八、十』（新釈漢文大系88、90、平2・2・10、平8・6・20、明治書院）
『老子・荘子　上』（阿部吉雄・山本敏夫、市川安司・遠藤哲夫、新釈漢文大系　、昭41・11・5、明治書院）
『荘子　下』（市川安司・遠藤哲夫、新釈漢文大系　、昭42・3・25、明治書院）
奥村恒哉校注『八代集1』（東洋文庫452、86・1・24、『同　2』（東洋文庫459、86・8・8、『同　3』（東洋文庫469、87・5・8、『同　4』（東洋文庫490、88・8・22、平凡社）
『新日本古典文学大系　別巻　八代集総索引』（久保田淳監修、95・1・20、岩波書店）
『新編国歌大観第二巻　私撰集編　歌集』『同　索引』「万葉集」「新撰万葉集」「新撰和歌」「古今和歌六帖」「金玉和歌集」

「和漢朗詠集」「玄玄集」「新撰朗詠集」「後葉和歌集」「続詞花和歌集」「今撰和歌集」「月詣和歌集」「玄玉和歌集」「新撰和歌六帖」「万代和歌集」「夫木和歌集」（「新編国歌大観」編集委員会編、昭59・3・15　角川書店）

『新編国歌大観第五巻　歌合編　歌学書・物語・日記等収録歌編　歌集』『同　索引』（昭52・4・10、角川書店）

『新編国歌大観第十巻　定数歌編Ⅱ　歌合編Ⅱ　補遺編　歌集』『同　索引』（平4・4・10、角川書店）

佐佐木信綱編『日本歌学大系　第三巻』後鳥羽天皇御撰「後鳥羽天皇御口伝」順徳天皇御撰「八雲御抄」上覚「和歌色葉」「三体和歌」藤原良経・同親経「新古今和歌集序」鴨長明「長明無名抄」鴨長明「瑩玉集」藤原定家「近代秀歌（遺送本）」藤原定家「近代秀歌（自筆本）」藤原定家「詠歌大概」藤原定家「毎月抄」藤原定家「秀歌大体」藤原定家「百人秀歌」藤原定家「百人一首」藤原定家「和歌秘抄」藤原定家等「先達物語（定家卿相語）」俊成女「越部禅尼消息」藤原為家「八雲口伝（詠歌一体）」慶融「追加（慶融法眼抄）」阿仏尼「夜の鶴」藤原為顕「竹園抄」「水無瀬の玉藻」（昭38・6・25、風間書房）

「撰集抄」（編纂者・原・塙保己一　補・太田藤四郎『続群書類従』第参拾弐輯下雑部、巻第九百五十三、大13・8・15、昭32・7・15訂正三版、昭32・4・1改正定価、続群書類従完成会）

米谷巌編・解説『せわ焼草』（昭51・3・29、ゆまに書房）第一巻之部「世話尽序・一、四季之話・二、神祇之話・三、釈教之話・四、恋之話・五、述懐之話・旅の話・俳諧之話・酒宴之話・碁之話・踊之話」・第二巻之部「十一、曳言之話・十二、消息之話・十三、市之話」・第三巻之部「十四、以呂波寄」・第四巻之部「十五、体用之話・十六、付句嫌物・十七、打越嫌物・十八、二句嫌物・十九、三句嫌物・二十、五句嫌物・二十一、七句嫌物・二十二、面嫌物・折嫌物・二十四、句数之事・二十五、誹諧制法之事・二十六、切字之事・二十七、賦物之事・二十八、誹諧和漢之事」・第五巻之部「二十

九、回文詞・三十、発句帖・三十一、付句・三十二、　千句之志綱」・自跋　解説・　索引「（一）せわ焼草俳言索引・（二）毛吹草類船集対照・せわ焼草付合見出語索引」）

玉井幸助『東関紀行・海道記』（岩波文庫30－136－1、35・8・15第1刷、97・3・6第8刷、岩波書店）
筑土鈴寛校訂『沙石集　上巻』『同　下巻』（岩波文庫30－135－一、43・4・15第1刷、97・11・12第3刷、岩波文庫30－135－2、43・11・25第1刷、97・11・12　第3刷、岩波書店）
西尾光一校注『撰集抄』（岩波文庫　黄24－1、70・1・16、95・1・17第10刷、岩波書店）
浅井了意『東海道名所記1』『同　2』（東洋文庫346、朝倉治彦校注、79・9・1、79・9・25、平凡社）
新村出校閲・竹内若校訂『毛吹草』（岩波文庫3304－3308、昭18・12・10第一刷、昭47・2・10第三刷、岩波書店）
柳亭種彦「還魂紙料」（〈編者〉日本随筆大成編輯部『日本随筆大成』〈第一期〉12↓昭2・9・28第一期第六巻、昭50・11・1、吉川弘文館）
山東京伝「骨董集」（〈編者〉日本随筆大成編輯部『日本随筆大成』〈第一期〉15↓昭2・11・28第一期第六巻、昭51・1・20、吉川弘文館）

（二〇〇一・一・一八）